

第十二講 ポストモダニズムと文化史

B. アンダーソン

東南アジア、特にインドネシア研究者

『想像の共同体』1983年（原著）

国民国家史の再検討

国民国家の歴史的起源の浅さ

言葉が国民及び国民国家を形作っていく

出版文化と国民国家との関係

P. ノラ

ユダヤ人

『記憶の場』1984-1992年（原著）

移民の流入

多文化・多民族状況

フランス国民のアイデンティティ

記憶の様々な断片

集合的記憶

国民意識の形成

植民地や移民の記憶の排除

ミクロストリア

カルロ・ギンズブルグ：『チーズと蛆虫』

メノッキオという粉屋のおやじを対象

16世紀後半、ルターに始まる宗教改革時代が背景

文字が読める農民

庶民の文化の文脈にエリートの知識を落とし込んで解釈する

新しい文化史

ブルクハルトなどの文化史と区別

1980年代以降

P. バーク

イギリスの中世史、特にルネサンス史研究者

『文化史学とは何か』 2004年 (原著)

文化史学の文化とは文化人類学でいう文化という意味で使われる

(文化人類学への接近)

人間活動の総体：日常生活の文化、習慣や価値、生活様式などを含む

新文化史：物質文化（例えば衣食住）の歴史や身体の歴史

身体をイメージとしてとらえ、そのイメージが時代や社会、文化や政治によって構築されていく

エリートの文化（文学や美術など）と民衆の文化（ゲームや祭りなど）

下からの歴史・征服された側の歴史・女性の観点

同じ出来事を異なった視点から眺め、そのことを意識する

羅城門的認識⇔社会学での多元的現実論

異なった人物による、同じ出来事に対して、異なった意味付けを行い、異なった現実を認識する

文化構築論

階級やジェンダー、共同体、王権、個人的アイデンティティ、すべてが文化的に構築されたもの

「すべての歴史は文化史となる」(フーコー)

新しい文化史が文化史の、さらには歴史学の主流

スクリプトからパフォーマンスへ

文化は固定的ではなく、即興によって環境に適した様々表現行動をとる